



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4083号 2017.12.17 発行

クリスマスなければ...シングルマザー 3割回答 1割が子供に「うちにはサンタは来ない」

産経新聞 2017年12月16日

「クリスマスなんてなければいい」。シングルマザーの3人に1人がそう考えたことがあると回答したとする調査結果を、サンタクロースを活用したボランティアをしているNPO法人「チャリティーサンタ」(東京)が明らかにした。余裕がないことなどが理由で、10人に1人は子どもに「うちにはサンタは来ない」と伝えたことがあると答えた。

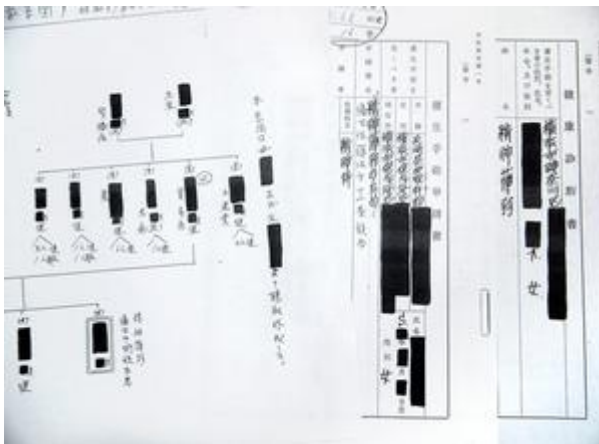
今年の調査は9月に実施、103人が回答した。「クリスマスなんてなくてもいい、来ないでほしい」と思ったことがあるかという問いに、38人(36・9%)が「ある」と回答。理由は「お金がかかる」「時間の余裕がない」「2人きりでさみしい」など。

クリスマス時期の気持ちを複数回答で尋ねると「楽しい」が58・3%でトップだったが「子どものためにもっとやってあげたい」が56・3%、「お金がかかって大変」が42・7%と続いた。年収が低くなるにつれ「切ない」「しんどい」という回答が増えた。

障害者の不妊強制、公文書に偏見 「月経の後始末も...」 田中陽子

朝日新聞 2017年12月16日

神奈川県優生保護審査会に医師が提出した申請書や家系図などの写し。文書は県立公文書館に保存されており、閲覧の際は個人名や年齢が伏せられる



旧優生保護法に基づいて障害者らに行われた強制的な不妊手術に関する、約半世紀前の公文書約80件分が神奈川県立公文書館で見つかった。「育児能力がない」といった偏見や病気を根拠に、手術の適否を審査した状況が具体的に記されている。こうした内容が、実際に用いられた行政資料で公になったのは初めてだ。

文書は同県優生保護審査会に提出された1962年度38件、70年度10件の手術申請書などと、63年度に実施された34件の手術費明細書など。立命館大生存学研究センターの利光恵子・客員研究員が見つけて分析し、10月に神戸市であった障害学会で発表した。

「不良な子孫の出生を防止する」ことを目的にした同法は、遺伝性とされた病気、精神障害や知的障害のある人に、本人同意なしの不妊手術を認めていた。「公益上必要」などと医師が判断した場合、都道府県の優生保護審査会に申請した。

見つかった申請書や検診録には成育歴や症状が書かれ、何代にもわたる親族の病気や職業を調べた家系図も添えられていた。

知的障害のある10代女性の場合、申請理由に「月経の後始末も出来ない」「一日中座位、幼児の如（ごと）く遊んでいるが、時々興奮、粗暴行為あり」とあった。別の知的障害の女性は子どもがおり、「これ以上生まれては、益々（ますます）生活困窮する」。「仕事熱心で成績は優秀」な男性は、統合失調症を発症した半年後、手術が必要だと判断された。

## 高齢者向け乗り放題タクシー、北九州でも 福岡で好評 井石栄司

朝日新聞 2017年12月17日

JTB九州（福岡市）は15日、北九州市内で1月19日から高齢者向けに定額の乗り放題タクシー「JTBジェロントタクシー」を走らせると発表した。定期券は1カ月あたり2万2千円から4万5千円。利用者は自宅とあらかじめ登録した2地点の間を乗り放題で使える。こうしたサービスは全国的にも珍しいという。

福岡市で2016年に実証実験をして、利用者から好評だったという。このため北九州市内でタクシーを運行する第一交通産業グループと提携し、3月まで期間限定で販売することにした。

利用者は午前9時から午後5時の間、自宅とあらかじめ決めた2地点の間が乗り放題になる。2日に1回程度外出すれば元が取れるという。タクシー会社にとっては利用が少ない時間帯に車両を有効活用できる利点がある。利用料が定期券代を超えた分はJTBが負担する。JTBにとっては新規顧客を獲得できる利点があるという。

## 飛び込み分娩、後絶たず...東北大病院と医療機関が連携、妊婦紹介に新制度「まず連絡を」

河北新報 2017年12月17日

クリニックからの電話を受ける東北大病院産科の医師

妊婦健診を受けていない女性が、陣痛や破水で医療機関に突然駆け込んで出産する「未受診・飛び込み分娩（ぶんべん）」が宮城県内で後を絶たない。飛び込み分娩は親の病気や胎児の週数が分からず、必要な治療が遅れるため、母子ともにリスクが非常に高い。医療関係者は「妊娠に気付いたら医療機関や行政に連絡するか、少なくとも身近な人に知らせてほしい」と呼び掛ける。



今年秋、買い物途中で腹痛を起こした女性が東北大病院に運ばれた。到着時、妊娠7カ月相当の胎児の心拍は既になかった。常位胎盤早期剥離だった。女性は感染症にもかかっていたが「妊娠に気付かなかった」と話したという。

斎藤昌利産科長は「もっと早くから受診していれば赤ちゃんは助かったかもしれないし、女性の感染症の治療もできた」と振り返る。

県産婦人科医会の委託で東北大病院がまとめた10年間の飛び込み分娩の推移はグラフの通り。年間20～45件で、このうち死産・早期新生児死亡が1～5件。今年は11月末までに22件で、うち死産は3件とリスクの高さがうかがえる。

年齢別では、24歳以下の初産婦が10人、30～34歳の経産婦が6人と多い。前者は周囲に相談できないまま週数がたち、親も子どもの体の変化を見逃していたというケースがほとんど。後者は「お金と時間がない」「上の子を預ける場所がない」などの理由で、

健診を受けなかったという。

大学病院産科は昨年7月、妊婦健診を行う県内全ての産婦人科施設に対し、未受診妊婦が来たら大学病院か仙台赤十字病院（仙台市太白区）に連絡し、受診可能な病院をコーディネートするシステムを全国に先駆けて開始した。今年4月には保健所にも通知した。

その結果、23人が受診につながった。システムがなければ、今年の飛び込み分娩はさらに増えたとみられる。

斎藤科長は「最初に訪れた病院で断られてしまい、その後医療機関に行けなくなる未受診妊婦も多かった。経済的なサポートや出産後の対応などをアドバイスできるので、まずどこかにコンタクトしてほしい」と話す。

## 児童手当の支給絞る 19年度以降、共働きは減額も 所得基準を世帯合算に

日本経済新聞 2017年12月16日

厚生労働省と財務省、内閣府は、子どものいる世帯に配る児童手当の制度を見直す。現在は世帯で最も稼ぎの多い人の所得をもとに支給額を決めているが、世帯全体の所得を合算して判定する方式に切り替える。浮いた財源は待機児童対策に充てるが、事実上の支給絞り込みで共働き夫婦など手当が減る家族も出る

## 非正規遠い“介護離職ゼロ” 企業「休業制度」の対象外 神戸新聞 2017年12月17日

週に数回は面接に臨む男性。求人は多いが...=神戸市内（画像を一部加工しています）



政府が掲げる「1億総活躍社会」からこぼれ落ちる人たちがいる。企業が介護休暇・休業制度の充実に取り組む一方、非正規雇用の従業員が対象外となるケースは多い。やむなく離職、その後の再就職でも結局、非正規就労を繰り返すことに。「介護離職ゼロ」「人づくり革命」などの掛け声とは裏腹に、不安定な雇用・就労の固定化が進む。専門家は「介護休暇・休業の対象拡大に加え、離職しても再就職で安定して働き続けられる支援が必要」と指摘する。（広畑千春）

「結婚もしたいけれど、仕事があってこそですよ」とつぶやくのは、両親の介護などで離職し、就職活動中という神戸市の男性（55）。「経験を生かして働きたいが、なかなかうまくいかない」

大学卒業後、団体に就職したが閉鎖的な人間関係に耐えきれず退職し、大阪や東京でビルや社宅管理などの仕事をした。

7年前、母が脳疾患で倒れた。しばらくは働き続けたが、周囲から「親を放っておくのか」と責められた。正社員なら介護休業制度もあったが、当時は派遣社員だったため対象外。人事担当者からは派遣先が契約更新をしない方針であると暗に告げられ、辞めるしかなかった。

母は施設や病院を転々とし、昨年12月に亡くなった。今年1月には86歳の父が転倒し骨折。幸い回復し、男性は求職活動を再開したが「求人は非正規の現場業務ばかり。正社員のマネジメント部門は若手採用が中心」とため息をつく。

同市の女性（56）も、今年亡くなった父を10年以上介護した。母は早くに他界。心臓や糖尿病の持病に加え、骨折などで入退院を繰り返す父の世話で手いっぱい。働く余裕はなかった。

父の死後、ハローワークに登録し、講習も受けた。ただ「24時間介護しかしておらず、経験も何もない」と話す。「今までは父の年金や貯金があったけれど、このままでは生活し



ていけない。早く働きたいが、何ができるのか…」と悩む。

国の2012年就業構造基本調査を基に大和総研が昨年まとめたデータによると、正規雇用の従業員が介護離職後、非正規雇用に就く割合は男性で53%、女性で74%に上った。離職前も非正規だった場合は、男性で72%、女性で95%と、さらに高かった。男性ではその後の就職活動が長期化する傾向もあり、亀井亜希子研究員は「この傾向が続けば、再就職率がたとえ上がっても、非正規化が進むだけ」と指摘する。

神戸学院大の西垣千春教授（社会福祉学）は「日本ではキャリアが途切れるのは不利とされ、働き盛りの40～50代への再就職支援が手薄。介護以外にもさまざまな問題を抱える人が多い。多方面からのサポートが必要」と強調している。

### 「保己一が失明後の人生の支え」 本庄で塙保己一賞授賞式



東京新聞 2017年12月17日  
指田忠司さん（前列左から2人目）ら3人の個人、1団体が表彰された「第11回塙保己一賞」＝本庄市の児玉文化会館で

江戸時代の盲目の国学者塙保己一（はなわほきいち）にちなみ、障害がありながら不屈の努力を続け、活躍している個人や団体を顕彰する「第十一回塙保己一賞」の表彰式が十六日、本庄市内で開かれた。

大賞には、障害者職業総合センター特別研究員で日本盲人福祉委員会常務理事を務める指田

忠司さん（64）が、奨励賞には生田流箏・三弦演奏家の沢村祐司さん（36）とパラリンピック競泳選手（東京ガス所属）の木村敬一さん（26）が、貢献賞に「視覚障がい者のための手でみる博物館」（盛岡市）がそれぞれ選ばれた。

「私は事故で失明し、何回かの手術の後、光が戻らないことが分かった時、絶望感に襲われました」。受賞者あいさつでそう語り始めた指田さんは「視力は終わってしまったが、まだ命はある。見えなくても立派に生きた先達がいる。ヘレン・ケラーしかり、塙保己一しかりと思ひ直した」。

川越高校時代に失明した指田さんは、東京教育大学付属盲学校を経て、早大法学部に進学した。

「保己一が失明後の人生の支えだった」と語る指田さんは「これからも視覚障害者として与えられた人生をしっかりと生き、同じ障害のある人々のために役立ちたいと思いを新たにしています」と結び、会場を埋めた約六百人から大きな拍手が送られた。

上田清司知事は「保己一の偉業を今日に生かし、共生社会を作るために伝えていきたい」とあいさつ。本庄市民による保己一の群読劇公演を例に挙げ、「こうした取り組みが県内や全国に広がることを期待したい」と述べた。（花井勝規）

### 車いすで飛行機搭乗の体験会 羽田空港

NHKニュース 2017年12月16日

車いすで飛行機を利用する際の不安を解消してもらおうと、実際に車いすに乗ったまま飛行機に搭乗する体験会が羽田空港で開かれました。

この体験会は日本航空や旅行会社、それに障害者の支援団体が羽田空港で開き、車いすの利用者や介助者など16人が参加しました。

参加した人たちはまず搭乗に支援が必要な人のためのカウンターがあることや、荷物の預け方、それに、保安検査場をそのまま通過できる木製の車いすの紹介を受けました。

続いて、飛行機への体験搭乗が行われ、参加者は機内の座席まで車いすで移動したあとスタッフに支えられながら席に移り、安定して座れるかや、痛いところがないかなどを確認

していました。

参加した33歳の男性は、「座席への乗り換えを不安に思っていたが、スタッフが要望をよく聞いてくれるので安心できました」と話していました。

日本航空によりますと、車いすで飛行機を利用する人は平成27年度におよそ9万4000人と、高齢化などを背景に5年間で倍増していますが、搭乗の際の不安から利用をためらっている人も多いと見られるということです。

日本航空の本田俊介執行役員は「飛行機に乗れない事情があればそれを取り除いて社会に貢献するとともに、利用者の拡大をビジネスにもつなげていきたい」と話していました。

### 県障害福祉科の名刺に 障害福祉事業所 デザイン案を披露

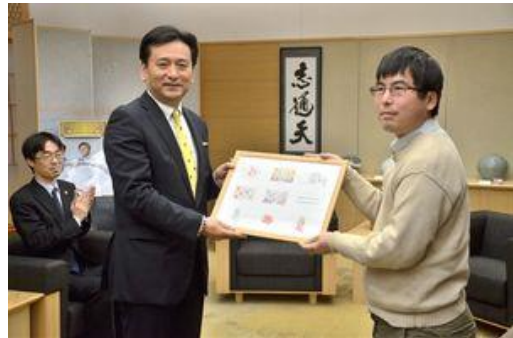
佐賀新聞 2017年12月17日

できあがった名刺の図案を山口知事に渡す「P I C F A (ピクファ)」の利用者=県庁

障害のある人が絵画やデザインの仕事を手がける基山町の障害福祉サービス事業所「P I C F A (ピクファ)」の利用者が14日、県庁を訪れ、山口祥義知事と共に取り組んだ名刺のデザイン案を披露した。県庁や唐津くんちの「鯛曳山」などが描かれ、にぎやかな仕上がりとなっている。

県の障害者月間(11月15～12月14日)の取り組みの一環で、山口知事が11月27日に同事業所を訪問し、利用者と一緒にイラストを描いた。名刺のデザインにふさわしいよう、個別のイラストを組み合わせ着色し、六つの図案に仕上げた。

できあがった図案のうち一つは、県障害福祉課の名刺に採用される。イラストを手がけた西依孝さん(38)は「名刺は多くの人目に触れるもので、形になったのはすごく光栄」と感想を語った。山口知事は「商売として実を結ぶとますますやる気になる。やりがいのある仕事をみんなで作っていき、魅力的な施設にしてもらえたら」と述べた。



### 広島) 入院、障害の子どもに木のおもちゃ 天野剛志 朝日新聞 2017年12月17日 組み木を制作する木楽会の会員や小学生ら=福山市



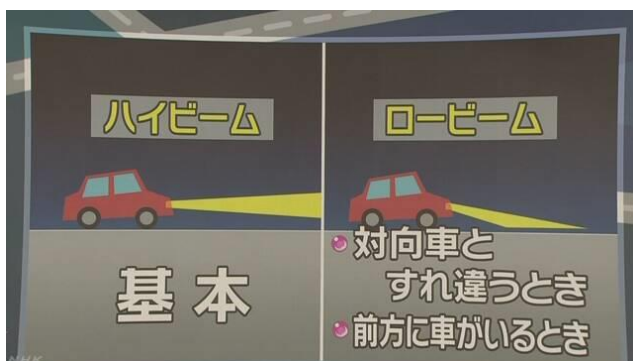
クリスマスに向け、備後地域の木工愛好者でつくる「木楽(きらく)会」(佐野節雄代表、53人)が、入院中や視覚障害のある子どもに木のおもちゃを贈る準備を進めている。おもちゃは、小学生のボランティアも募って手作りで制作。6施設に約400個を贈る予定だ。



同会は、東日本大震災で被災した子どもたちや、地元で入院中の子どもたちに組み木のおもちゃを作って贈る活動に取り組んできた。今年はものづくりの楽しさを体験してもらおうと、小学生にボランティアへの参加を呼びかけた。

制作は9月から始まり、小学生は15人が参加。佐野さんと親交がある岡山県倉敷市の組み木作家、小黒三郎さんのデザインをもとに、来年のえとにちなんで主に「犬」の組み木を電動糸ノコやサンドペーパーを利用して作った。

## 交通安全の切り札になるか？



ルールはどうなっているのか。警察は、「ハイビームが基本で、対向車とすれ違うときや、前に車がいるときは、ロービームに切り替える」ことが正解だと説明しています。ただ、この説明に違和感を覚える人も少なくないのではないのでしょうか。そもそも、法律にはどう書いてあるのか、調べてみました。

道路交通法は、「車両等は、夜間、道路にあるときは、政令で定めるところにより、前照灯、車幅灯、尾灯その他の灯火をつけなければならない」と定めていますが、私には、「夜、ライトをつけましょう」としか読めません。この法律のどこから「基本はハイビーム」という交通ルールが読み解けるのでしょうか。

警察や、国土交通省に聞いてみたところ、「『道路交通法』と、『道路交通法施行令』や『道路運送車両の保安基準』、それに『道路運送車両の保安基準の細目を定める告示』を組み合わせると、『基本はハイビーム』というルールがわかる」という、なんともわかりにくい答えが返ってきました。

では、ハイビームが基本だということは、それに従わない場合は、罰則があるのか。結論から言うと、ハイビームにしなくても罰則はありません。ただ、対向車とすれ違うときに、ハイビームをロービームに切り換えるなどしなければ、「減光等義務違反」として点数1点、普通車では6000円の反則金が科されます。

ルールがわかりにくい上、免許を取った世代や教習所によってハイビームの使い方の教わり方もまちまちで、一般のドライバーからする

NHKニュース 2017年12月15日  
12月は日が短くなることなどから、交通事故の発生件数が年間で最も多くなります。年末にかけて、夜間の運転は、特に気を使わなければなりません。こうした中、ことし、警察庁は車のヘッドライトを上向きにするハイビームをきちんと使えば夜間の事故を減らせた可能性が高いという調査結果を発表しました。ただ、ドライバーからは、戸惑いの声も聞かれます。  
(福井放送局記者 丹羽由香 ネットワーク報道部記者 栗原岳史)

## わかりにくい交通ルール

ツイッターではハイビームについて、「切り替えは面倒だ」、「まぶしいからやめてほしい」という意見が見られます。「ハイビームを使うと相手を煽っているようだ」、「トラブルに巻き込まれたくないから使いたくない」という声もよく聞かれます。

ロービームとハイビームをめぐる交通





と、ハイビームにするメリットはあるのか、という疑問が出てくるのも無理はありません。

### 警察は啓発強化

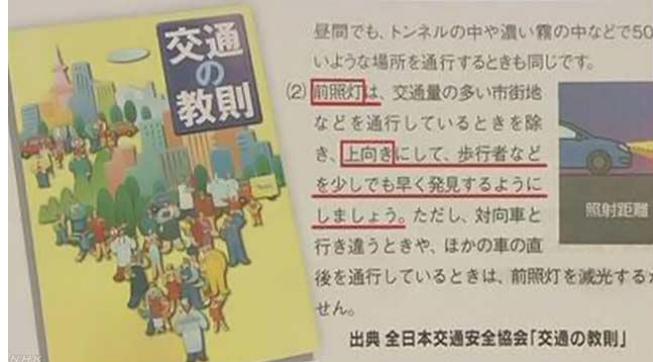
SNSなどでこうした声上がる背景には、警察で、ことしに入ってからより積極的にハイビームの利用を呼びかけているということがあります。警察庁は、ことし1月から6月にかけて全国で起きた車と歩行者の衝突事故についてまとめた調査結果で、飲酒や過労運転を除いた夜間と日没前後の事故のうち、「ハイビーム」にしていれば「半数以上の56%の事故が防げた可能性が高い」と分析しています。

### 教則本

また、免許を取るときなどに使う「教則本」の記述も、ことし変わり、それまでの教則本にはなかった、ハイビームの利用を促す一文が追加されました。

### 高齢化が背景

なぜ警察は、最近になってハイビームの啓発を強めているのか。その背景には、ドライバーの高齢化が関係しています。



日本大学生産工学部景山一郎教授  
交通事故に詳

しい日本大学生産工学部の景山一郎教授は、



「一般的に、高齢者は、危険を見つけてから、ブレーキを踏むなどの対応をするまでの時間が若い人と比べると長くかかると言われている。全国的に高齢のドライバーが増える中でハイビームの重要性は、今後、さらに増していくだろう」と指摘しています。例えば、時速50キロで走っている車は、ロービームの光が届く40メートル先までは2秒で到達するのに対し、ハイビームが照らす100メートル先まで行くには、2倍以上の5秒かかります。危険回避をするための、

この時間差が、高齢ドライバーにとっては特に重要だということです。

## 意外な死角も

先月、福井県で大学生を対象に、ハイビームの効果を体感してもらう実験が行われました。車の前方に歩行者に見立てたコーンを置き、ロービームとハイビームの切り替えをすると、100メートル先に置いてあるコーンも、はっきり見えることがわかります。

しかし、実験ではハイビームにすることで道路脇にいる人の見え方も一目瞭然で違うことがわかりました。歩行者が歩く道路脇も、実はロービームの死角となっていたのです。

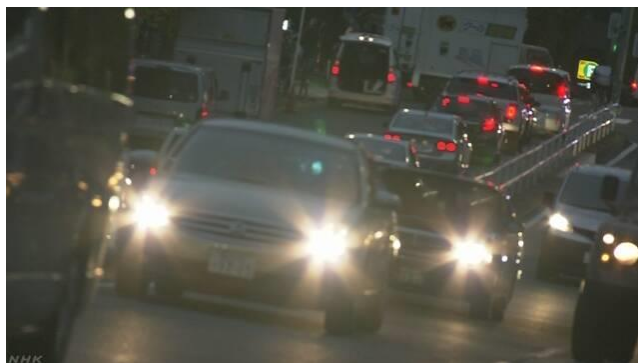
前後の視界だけでなく、ドライバーの左右の視野も大きく広げるハイビームを利用することで、歩道を歩く人や、道路を横断しようとする人にいち早く気が付くことができ、事故防止にもつながると言えます。

### 「使い分け」が重要

日本大学の景山教授は、「ハイビームをためらう気持ちもよくわかるが、ロービームと比べ、見える範囲は格段に広がり、事故も防げるので、積極的にハイビームを利用する機運が広がってほしい」と話しています。

一方で、「基本はハイビーム」とはいえ、切り替えずにずっとハイビームにしていると、対向車のヘッドライトの光で瞳孔が閉じてしまい、人が消えて見えなくなる「蒸発現象」が生じ、逆に、事故にもつながりかねません。

つまり、大切なのは、ロービームとハイビームをこまめに切り替えることだということです。多少面倒でも、手元の操作1つでできる簡単な交通安全対策。きょうから少しだけ意識をして運転してみてください。



## 福祉法人がXマス発表会 幼児と高齢者が世代超え交流



山陰中央新報 2017年12月17日  
元気よく発表する園児

社会福祉法人あすなる会（島根県出雲市白枝町、竹内一夫理事長）が運営する保育園と福祉施設による「あすなるクリスマス発表会」が16日、出雲市塩冶有原町2丁目の市民会館であり、幼児や高齢者が世代を超え、歌や踊りを楽しみながら披露した。

発表会は同会の年末恒例行事。二つの保育園の園児やデイサービスセンター利用者らが出演し、会場は総勢約130

0人で埋まった。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行